

第4章 まちづくりの地域展開

「圏域」、「空間」、「拠点」と「軸」による枠組みから、地域での展開を示します。

①地域活動の考え方

【基本方向】

人びとの行動が広域的になってきている昨今では、さまざまな施策を周辺市町村との連携で広域的に解決すべき課題も増えています。一方、教育や福祉、防災、生活環境維持の面などからは地域コミュニティの重要性が高まり、これらに基づくコミュニティ活動の促進が求められています。

このため、安全・安心のまちづくりを進めていくための基本となる基礎的な圏域として、徒歩圏での活動が容易な小学校区を

コミュニティ圏域と設定し、交流と連携が生み出せる環境の充実と住民活動の支援を図ります。

また、さらに身近なまちづくりの単位としては、自治会（区）を基礎にした活動があり、まちづくり協議会などの地域での取り組みをはじめ、状況に応じた地域活動の展開を積極的に支援していきます。

【コミュニティ圏域の設定】

次の5つをコミュニティ圏域として設定します。

- 北部地域（精北小学校区）
- 中東部地域（川西小学校区）
- 中西部地域（精華台小学校区）
- 西部地域（東光小学校区）
- 南部地域（山田荘小学校区）

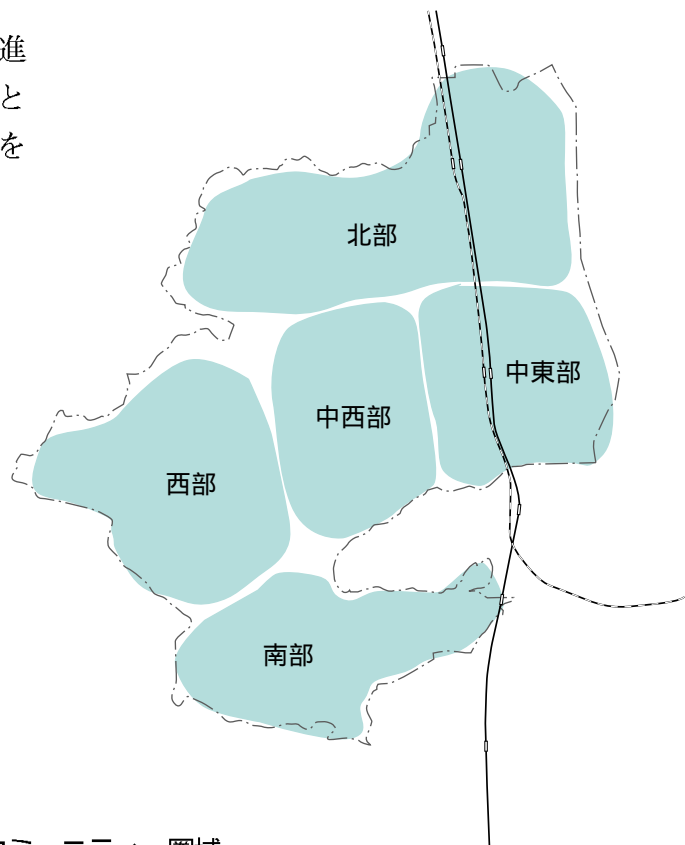


図1 コミュニティ圏域

②土地利用の基本方向

【基本方向】

多様性を保ちながらも、町全体で統一感のある魅力的な地域空間を形成していくために、4つのゾーンを設定し、ゾーン別に土地利用の基本方向を示します。

○水辺のゾーン

“木津川を軸とした親水空間の形成”

木津川流域を「水辺のゾーン」として位置付けます。

ここでは、木津川の自然環境を保全することを基調として、水に親しめる空間の機能にも着目した水辺空間の形成を図ります。

○農と里のゾーン

“豊かな田園空間の形成”

木津川から西側に広がる田園地域や国道163号沿道の農村集落地域を「農と里のゾーン」として位置付けます。

ここでは、既存集落の住環境と営農空間の整備を進めるとともに、貴重な田園風景の残る空間として、また市民農園や観光農園など自然とのふれあいができる貴重な空間としての形成を図ります。また、本ゾーンを流れる煤谷川や山田川などの河川やため池は、親水空間として住民が憩い、地域づくりに生かせる環境として位置付け、積極的な活用を図ります。

○まちのゾーン

“良好な住環境と多様な都市活動空間の形成”

学研都市による新たな開発地区や駅周辺の既成市街地を「まちのゾーン」として位置付けます。

学研都市の住宅区域では良好な住環境を維持し、文化学術研究などの施設区域では研究開発や新産業創出機能を強化します。既成市街地では、住環境の維持・改善と、人びとの多様な都市活動ができる地域として、バリアフリー*を基本とした空間形成を図ります。

○森と里山のゾーン

“豊かな里山空間の形成”

西部や南部の森林地域を「森と里山のゾーン」として位置付けます。

ここでは、森林の保全と育成を基調としながら、人と自然の共生できる里山空間として形成を図ります。また、町域の6分の1を占める自衛隊用地の有効な活用を図り、貴重な森林の緑を保全し、後世に伝えていきます。

バリアフリー…障害者が社会生活を営むうえででの障壁（バリア）をなくすこと。バリアには意識上のもの、建物などの物理的なもの、制度的なものなどがある。

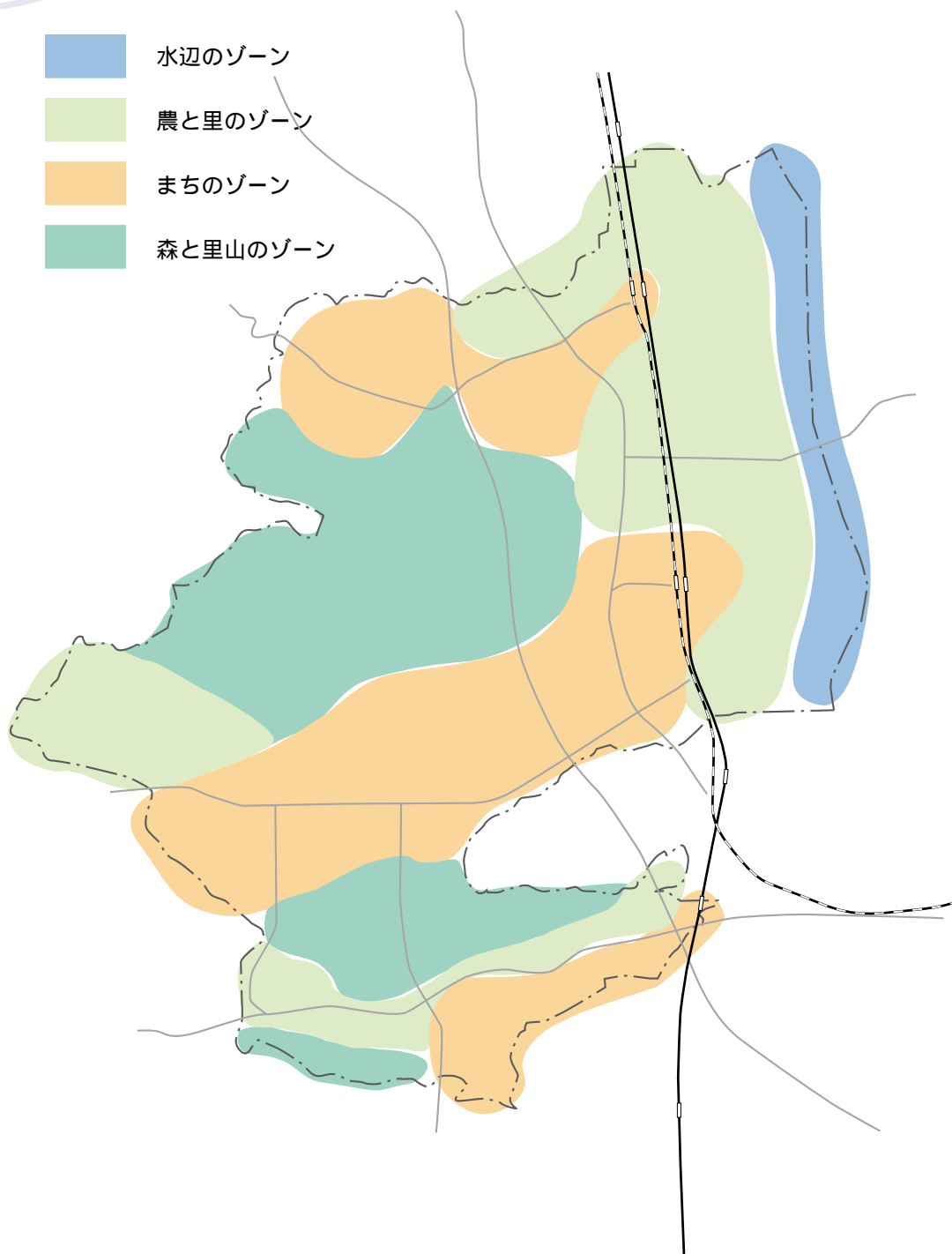


図2 土地利用区分

③都市機能の集積と交流・連携の基本方向

【基本方向】

本町の都市機能の集積と交流・連携を、拠点や軸で明らかにすることによって、メリハリのある個性的なまちづくりを展開するとともに、効率的な施策の展開を図ります。

- 「都市拠点」では、多様な都市機能（商業、業務、文化、学術研究、新産業、行政など）が集積するとともに、人びとの交流活動が活発に展開される拠点を意味し、そのような拠点形成をめざします。
- 「都市軸」では、人や物、情報などの主要な流れを表すとともに、都市機能の集積と優れた都市景観を形成していく軸を意味し、ゾーンや都市拠点などを結んで、さまざまな交流・連携を図っていきます。

<都市拠点>

都市拠点は、「まちの拠点」、「学研の拠点」、「地域の拠点」とします。

○まちの拠点

＝祝園駅周辺

役場庁舎や図書館、病院、商業・業務施設などが集積する「祝園駅周辺」を位置付け、町の中心機能を担う拠点として機能の充実をめざすとともに、学研都市への玄関口として、その役割の強化を図ります。

○学研の拠点

＝けいはんなプラザ周辺

学研都市の中核施設であるけいはんなプラザ周辺を位置付け、学術研究や文化を発信し、人や情報の交流が生み出される機能を担うとともに、研究成果から新産業を生み出す拠点として、学研都市の機能発揮を図ります。

○地域の拠点

＝北部拠点：狛田駅周辺、 南部拠点：山田川駅周辺

交通結節点である狛田駅周辺を「北部拠点」、山田川駅周辺を「南部拠点」と位置付け、北部地域・南部地域の日常的な商業機能と交流機能を担う拠点にふさわしい環境整備を図ります。

<都市軸>

都市軸は、「都市シンボル軸」「広域交流連携軸」「地域間交流連携軸」とします。

○都市シンボル軸

＝南北軸：山手幹線・府道八幡木津線・町道菅井・菱田線・JR学研都市線・近鉄京都線などを含む軸

＝東西軸：精華大通り線・中央通り線を含む軸

「南北軸」と「東西軸」を位置付け、本

町の骨格となる軸として交通基盤の充実を図り、交流・連携機能を強化します。

特に、学研都市間の連携を強化するために、京田辺市や木津町方面とを結ぶ「山手幹線」の延伸、生駒市方面とを結ぶ「精華大通り線」の延伸について、早期の整備促進を図ります。

また、沿道には多様な都市機能が集積することによって、軸に沿った交流と連携のにぎわいを生み出し、町の骨格となるシンボリックな空間をめざすとともに、その景観形成を図ります。

○広域交流連携軸

＝京奈和自動車道を含む軸

京奈和自動車道を位置付け、京都市や奈良市など府県を越えた広域の交流・連携強化を図ります。

○地域間交流連携軸

＝国道163号、奈良精華線、枚方山城線、(仮称)南田辺大通り線をそれぞれ含む軸

国道163号、奈良精華線、枚方山城線、(仮称)南田辺大通り線をそれぞれ位置付け、交通基盤の充実を図って、近隣市町村間の交流と連携強化を図ります。

＜公共交通の充実＞

都市機能の集積と交流・連携を強化する手段として、公共交通の充実を図ります。

京阪奈新線(生駒～登美ヶ丘)の整備促進を引き続き関係機関に要望するとともに、新しい交通システムを利用した移動手段の検討についても、関係機関と協議を進めます。

大阪・神戸方面や関西文化学術研究都市内の関係市町との連携を強化するために、JR学研都市線の複線化や増便について、関係機関への働きかけを行います。

民間事業者の動向も踏まえ、町内や近隣市町村、奈良県側などとの公共交通ネットワークを整備促進するとともに、町内での公共交通体系の確立をめざし、コミュニティバス*の運行などさまざまな方法の検討を進めます。

学研都市内で試みられている「デマンドバス*」や「カーシェアリング*」などを利用した高度道路交通システム(ITS)*の実用化実験については、関係機関と連携して積極的に促進し、誰もが自由に移動のできる社会をめざします。

コミュニティバス…路線バスと乗合いタクシーの間を埋める小型バスで、バス不便地域を運行する新乗合いバスの総称。

デマンドバス…利用者が電話で乗車したい時間、場所、目的地を管理センターに伝えると、バスの運行状況をチェックした上で、オペレーターが乗車可能な時間と場所、目的地の到着時間などを教えてくれる仕組み。

カーシェアリング…低公害車を利用し、車を乗り降りする専用ポートを設け、管理センターで予約状況をチェックしながら会員に空いている車を一定時間使ってもらう仕組み。

高度道路交通システム(ITS)…最先端の情報通信技術により、道路交通情報の提供、自動運転、料金の自動収受などにより実現する高度道路交通システム。ITSは、Intelligent Transport Systemsの略。

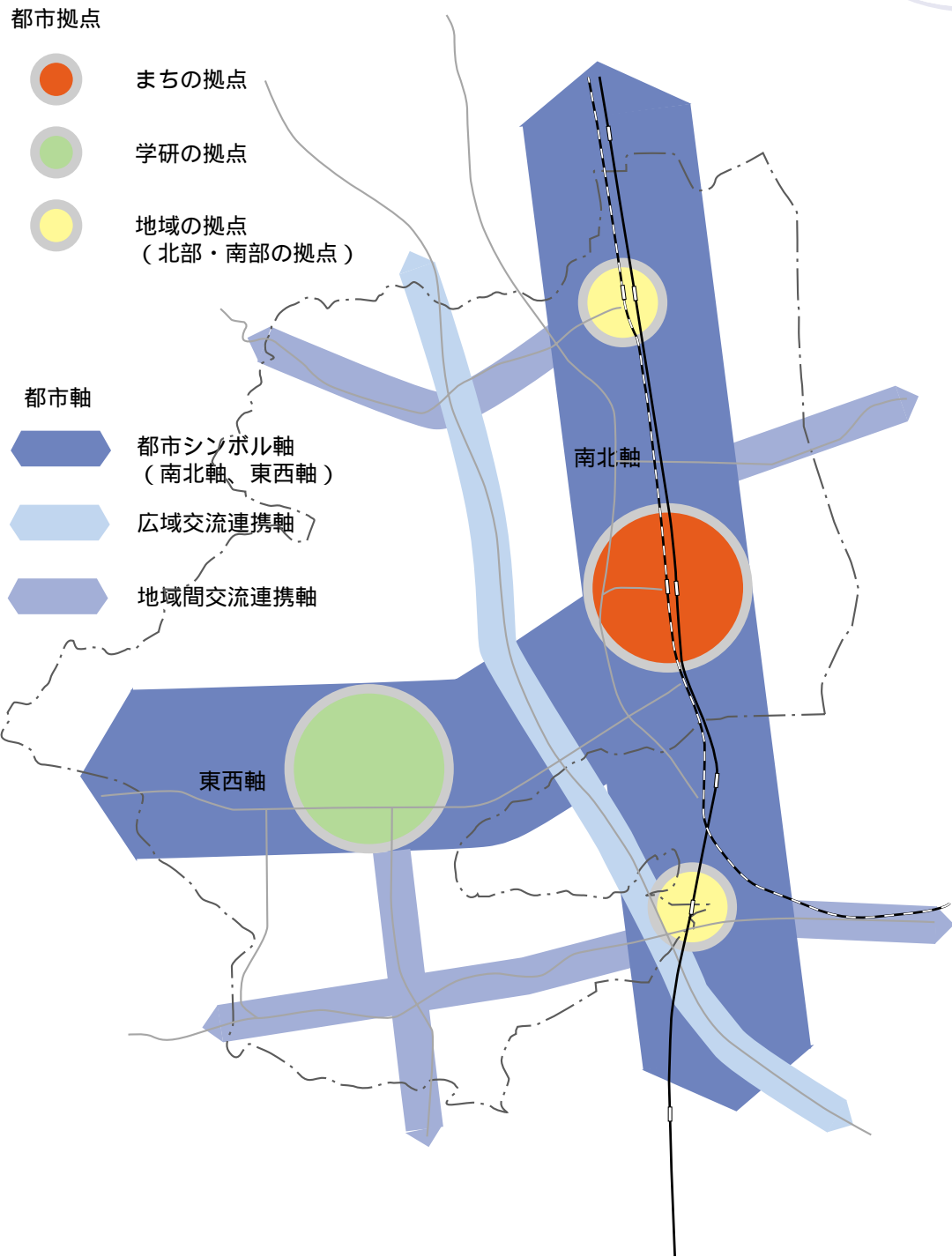


図3 都市機能の集積と交流・連携の概念図